

カンガルー日和

柵さくの中には四匹のカンガルーがいた。一匹が雄で二匹が雌、あとの一匹が生まれたばかりの子供である。

カンガルーの柵の前には、僕と彼女しかいない。もともとたいして人気のある動物園でもないし、おまけに月曜の朝だ。入場客の数よりは動物の数の方がずっと多い。

我々の目あてはもちろんカンガルーの赤ん坊である。それ以外に見るべきものなんて何も思いつかない。

我々は一月前の新聞の地方版でカンガルーの赤ん坊の誕生を知った。そして一カ月間、カンガルーの赤ん坊を見物するに相あ応こたしい朝の到来を待ち続けているのである。しかし、そんな朝はなかなかやってはこなかった。ある朝には雨が降っていた。次の朝にもやはり雨は降っていた。その次の朝には地面がぬかるんでいたし、それに続く二日間嫌な風が吹いていた。ある朝には彼女の虫歯が痛み、ある朝には僕が区役所に出かけねばならなかった。

そんな風にして一カ月が過ぎた。

一カ月なんて、まったくのところ、あつという間に過ぎてしまふ。この一カ月のあいだいったい何をしていたのか、僕にはまるで思い出せない。いろんなことをやったような気もするし、何もしなかったような気もする。月末になって新聞の集金人がやってくるまで、一カ月が過ぎてしまったことにさえ僕は気づかなかった。

しかし何はともあれ、カンガルーを見るための朝はやってきた。我々は朝の六時に目覚め、窓のカーテンを開け、それがカンガルー日和びよであることを一瞬のうちに確認した。我々は顔を洗い、食事を済ませ、猫に食事を与え、洗濯をし、日除ひよけ帽をかぶって家を出た。

「ねえ、まだカンガルーの赤ん坊は生きているかな？」と電車の中で彼女は僕に訊ねた。

「生きてると思うよ。だって死んだってという記事が出ないもの」

「病気をして、どこかに入院したかもしれないわよ」

「それにしても記事は出るさ」

「ノイローゼにかかって奥にひっこんでるんじゃないかしら」

「赤ん坊が？」

「まさか。母親がよ。奥の暗い部屋に赤ん坊を連れてとじこもってるんじゃないな

いかしら」

女の子というのは実にいろんな可能性を思いつくものだ。僕は感心する。

「なんだか、この機会を逃すと二度とカンガルーの赤ちゃんを見られないような気がするのよ」

「そんなものかな」

「だってあなた、これまでにカンガルーの赤ちゃんを見たことある？」

「いや、ないな」

「これから先、見るだろうって自信ある？」

「どうだろう。わからないよ」

「だから私は心配してるのよ」

「でもね」と僕は抗議した。「たしかに君の言うとおりがもしれないけれど、僕はキリンのお産だって見たことないし、鯨が泳いでいるところだって見たことがない。なぜそれなのにカンガルーの赤ちゃんだけがいま問題になるのだろうか」

「カンガルーの赤ちゃんだからよ」と彼女は言った。

僕はあきらめて新聞を眺める。これまで女の子と議論して勝ったことなんて一度もない。

カンガルーの赤ん坊はもちろん生きていた。彼（あるいは彼女）は新聞の写真で見たよりずっと大きくなっていて、元気に地面を駆けまわっていた。それはもう赤ん坊というよりは小型のカンガルーだった。その事実が彼女を少しがっかりさせる。

「もう赤ん坊じゃないみたい」

赤ん坊みたいなもんだよ、と僕は彼女を慰める。

「もっと早く来るべきだったのよ」

僕が売店まで行ってチョコレート・アイスクリームをふたつ買って戻ってきた時、彼女はまだ柵にもたれてじっとカンガルーを眺めていた。

「もう赤ん坊じゃないのよ」と彼女は繰り返した。

「そう？」と言って僕はアイスクリームをひとつ彼女にわたす。

「だって赤ん坊ならお母さんの袋に入ってるはずよ」

僕は肯いてアイスクリームをなめる。

「でも入ってないもの」

我々はとりあえず母親カンガルーを探した。父親カンガルーの方はすぐにはなかった。いちばん巨大で、いちばん物静かなのが父親カンガルーだ。彼は才能

が枯れ尽きてしまった作曲家のような顔つきで餌箱えさばこの中の緑の葉をじっと眺めている。残りの二匹は雌だが、どちらも同じような体つきで、同じような体色で、同じような顔つきである。どちらが母親だとしてもおかしくはない。

「でも、どちらかが母親で、どちらかが母親じゃないんだ」と僕は言った。

「うん」

「とすると、母親じゃない方のカンガルーはいつたいなんだ？」

わからない、と彼女は言った。

そんなことはおかまいなくカンガルーの赤ん坊は地面を走りまわり、ところどころに意味もなく前足で穴を掘りつづけていた。彼／彼女は退屈を知らぬ生きものであるようだった。父親の周囲をぐるぐるとまわり、緑の草を少しだけ齧り、地面を掘り、二匹の雌カンガルーにちよつかいを出し、地面にごろりと横になり、そしてまた起き上がって走りはじめた。

「なぜカンガルーはあんなに速く跳んで走るのかしら？」と彼女が訊ねた。

「敵から逃げるためさ」

「敵？　どんな敵？」

「人間だよ」と僕は言った。「人間がブーメランでカンガルーを殺して肉を食べるんだ」

「なぜカンガルーの赤ん坊はお母さんのおなかの袋に入るの？」

「一緒に逃げるためさ。子供はそんなに速く走れないから」

「保護されているのね？」

「うん」と僕は言う。「子供はみんな保護されているんだ」

「どれくらいの期間保護されるの？」

僕は動物図鑑でカンガルーについての何もかもをきちんと調べてくるべきであつたのだ。こうなることははじめからわかっていただから。

「一カ月か二カ月、そんなものだろうな」

「じゃあ、あの子はまだ一カ月だから」と彼女は赤ん坊カンガルーを指さす。

「お母さんの袋の中に入るわけね」

「うん」僕は言った。「たぶんね」

「ねえ、あの袋の中に入るって素敵だと思わない？」

「そうだね」

「ドラえもんのポケットって胎内回帰願望なのかしら？」

「どうかな」

「きつとそうよ」

日はすっかり高くなっていた。近くのプールからは子供たちの歓声が聞こえ

てくる。空にはくつきりとした夏の雲が浮かんでいた。

「何か食べる？」と僕は彼女に訊ねた。

「ホットドッグ」と彼女は言った。「それにコーラ」

ホットドッグ売りは若い学生アルバイトで、ワゴンの形をした屋台の中に大型のラジオ・カセットを持ちこんでいた。ホットドッグが焼きあがるまでステイビー・ワンダーとビリー・ジョエルが歌を唄ってくれた。

僕がカンガルーの柵に戻ると、彼女は「ほら」と言っで一匹の雌カンガルーを指さした。

「ほら、見て、袋の中に入ったわよ」

たしかに赤ん坊カンガルーは母親の袋の中にもぐりこんでいた。おなかの袋は大きくふくらんで、小さな尖った耳と尻尾の先端だけがぴよこんと上にとび出していた。

「重くないのかしら？」

「カンガルーは力持ちなんだ」

「本当？」

「だから今まで生き延びてきたんだ」

母親は強い日差しの中で汗ひとつかいてはいなかった。青山通りのスー



パー・マーケットで昼下がりの買物を済ませ、コーヒー・ショップでちよつと一服しているとといった感じた。

「保護されているのね？」

「うん」

「寝ちゃったのかしら？」

「たぶんね」

我々はホットドッグを食べ、コーラを飲み、そしてカンガルーの柵をあとにした。

我々が立ち去る時にも父親カンガルーはまだ餌箱の中に失われた音符を捜し求めていた。母親カンガルーと赤ん坊カンガルーは一体となって時の流れに体を休め、ミステリアスな雌カンガルーは尻尾の具合を試すように柵の中で跳躍を繰り返していた。

久し振りに暑い一日になりそうだった。

「ねえ、ビールでも飲まない？」と彼女は言った。

「いいね」と僕は言った。